

優秀賞の「自分列車」は、日常からふっと逃げたくなった高校二年生の女子が、夏休みに「自分探しの旅」に出て、列車のなかでいろいろな人たちと出会う様が描かれています。

顔をハンカチで押さえて泣いている若い女性、サングラスをかけたキャリアウーマン、女子高生の母に似た中年の女性など、入れ替わり立ち替わり乗車してくる人たちは、女子高生の心に、さまざまな言葉をのこしていきます。

舞台背景の設定やストーリー展開に、新鮮味があまり感じられないこと。

「自分列車」というタイトルから、乗客たちの正体がほぼ予想できてしまうこと。

その二点が気になりましたが、書きたいテーマはしっかりしていますし、物語の運び方もうまいです。主人公の女子高生のキャラ設定は平凡ではありますが、それゆえに親しみやすく、彼女の思いや行動に共感を抱く読者は多いことでしょう。

「自分探しの旅」から「自分づくりの旅」へと、主人公が未来に気持ちを向けるラストも明るく爽やかで、きれいにまとまっている作品だと思いました。

奨励賞の「雨溜まりの世界」は、書き出しにインパクトがあります。突然立ち上がり、「早退します」と凜とした声を放つ女子。その瞬間の教室の様子を手にとるように描写されていて、思わず引き込まれました。

ある事情から、大きなシャベルであちこちに穴を掘る高一女子と、その姿に魅せられて、結果的に見守るかたちになる同級生の男子の物語。主役の二人が魅力的ですし、作品全体から、作者がこの話を書きたいと思った熱のようなものが伝わってきて、その点にとっても心惹かれました。

ただ、作者が書き表したいと思っている世界に、まだ文章力や構成力が追いついていないため、少々バランスの悪い作品になっています。ファーストシーン以外は冗長で退屈してしまうところも幾つかありましたので、過剰な表現や、場面の数をもう少し整理して、いまの半分ぐらいの長さになると、シャープな印象の作品になるでしょう。

最終候補に残った作品は、いい意味でお行儀のよい、きちんとしているものが多かったように思いました。それは讃えるべき長所ではありますが、もっと遊びを入れたり、冒険をしてみてもいいのではと思います。型破りであったり、とんでもない発想であったりといった、若さあふれる作品との出会いも楽しみにしています。今回惜しくも入賞には至りませんが、「コンビニ強盗（裏）」はユニークでおもしろかったです。

自身のなかで普段は眠っている部分、息をひそめている部分も、表に引っ張り出して、スポットライトを当ててあげましょう。それも創作の楽しさのひとつです。